

## 大学体育の必修化について思うこと

福岡国際大学 大浦 隆陽

### 1. はじめに

大学体育は、戦後新制大学発足時に、大学のカリキュラムの中に導入されました。それがその後、そのまま必修かあるいは選択科目にするか、さらに保健体育科目を開設するか否かが、各大学の方針に委ねられるようになってから久しくなります。その間体育実技は、多くの大学で選択科目として位置づけられ再出発いたしました。このことについては、先生方はよくご存知のことですが、平成20年度本連合の春期研修会における、山田茂先生（当時：全国大学体育連合理事長（東京大学）、現：実践女子大学教授）の招待講演の中で詳しく述べられています。（体育・スポーツ教育研究第10巻第1号 参照）

その大学体育が、近年選択科目から再び必修科目へと姿を変えた大学がみられるようになってきました。このような変化をもたらしつつある背景には、子どもや学生の体力低下への危惧、健康ブームなどがあり、そして大学には解決すべき学生のメンタルヘルスの問題、一方では、体育の先生方の学生指導への評価、不断の授業研究の積み重ねなどが、必修化へと向かう流れを醸し出すようになってきたのではないかと私は考えています。

### 2. 選択から必修へ

さて、本学は平成10年（1998年）に福岡女子短期大学の定員を持ち出し、同キャンパス敷地内にて開学しました。（現在：定員1学年120名）体育実技は、一年次の基礎教育科目の選択科目として、また講義は「スポーツと健康の科学」と銘うち選択必修科目としてカリキュラムの中に組み込まれました。体育実技及び講義は、専任教員私ひとりでの担当です。開学時は40%の履修者であった体育実技は、二年目より平均して70%前後の学生が履修するようになりました。その選択科目であった体育実技が、平成22年度入学生（現3年生）からは必修科目となったのです。まずその必修化された経緯について触れることにいたします。

私は、平成18年4月、学生部長という任に就くことになりました。就任早々、入学式・オリエンテーショ

ンで入学生や保護者に「学生生活について」ということで話をしなければなりません。そこで私は、充実した学生生活を送るためには「心身の健康が基本となる」また、「心身の健康は学士力の基礎である」（本学は、卒業時に「コミュニケーション学士」という称号を授与している）とキラキラした、あるいは不安げな眼差しに向けて語りかけました。切り口を変えながらも、19・20・21年度と同様の話をしたのです。それを隣の席で聞いていた教務部長（現：安達義弘学長）が、平成21年5月のとある日、唐突に「大浦さん体育実技を必修にしたらどうかなあ」と、私は即座に「無理無理、それに体育実技1単位で卒業できない学生がでたら大変だし」と返答しまして、少々押し問答が続いたのを記憶しています。最終的には、私と教務部長の「学生の心身の健康は、大学として考えていかなければならない重要な問題である」・「コミュニケーション学士としてのスキルアップに体育実技は、重要な科目である」という意見の一致をみました。そこで私が、教務委員会に「体育実技の必修化について」という提案書を提出する運びとなったのです。早々に、同年6月の教務委員会、教授会で審議され理事会の承認を経て、平成22年度入学生から体育実技が必修科目となりました。

### 3. 必修後の体育実技

本学は、 Semester制を採用しているので体育実技は、他の一年次の必修科目と表裏のような組み合わせをして、前・後期に分けて開講しています。また一年生は、プレゼミという形で8クラスに（一クラス12～15名）分けています。そして、二つのクラスが一まとまりになり、体育実技を受講します。加えて、必修化に伴って、通常の体育実技を受講するのが困難な学生については、別枠で「メディカルクラス」という体育実技の時間を設けました。学生の健康状態、障がいの有無などは、入学時に提出される調査書によって保健室が把握し、私のところへマル秘情報として知られる仕組みになっています。それをもとに、個別に受講の仕方を話し合い、如何にするかを定めるようにして

います。

これまでの二年間及び今年度の（平成24年度）前期まで、肢体不自由（2名）、難聴（1名）、脳腫瘍術後（2名）が「メディカルクラス」受講の可能性をもつ主な症例ですが、いずれの学生も「仲間と一緒にやりたい」と通常の体育実技を希望し、まだ「メディカルクラス」で受講した学生はいません。

次に受講率ですが、体育実技は現三年生からは必修科目ですので100%の履修率です。参考までに、選択科目であった四年生の受講率は、79.8%でした。また、講義（選択必修）は、前後期合わせて、四年生（73.7%）・三年生（86.3%）・二年生（93.0%）で、一年生は前期の段階で（61.0%）の受講率です。

必修化後、体育実技の単位未取得の学生は、三年生（3Yさん）1名・二年生（2A～2Eさん）5名、計6名がいます。全員、配慮の余地がない出席回数（0～5）でした。これらの学生は、総じて取得単位が極めて少なく、それは、履修登録はしているものの、いずれの授業にもほとんど出席しておらず、受験資格が与えられないという事によるものです。これらの学生の今後の方向性は、

- ① 一念発起し卒業要件単位の取得を目指して努力する。
- ② 保護者あるいは学生自身が見切りをつけ退学する。
- ③ この状態を変えられず、方向性を見いだすまで時間を費やす。

というような大きく三つのパターンに分かれるかと思えます。

体育実技の関連からは、全員が身体的な疾患や障がい等の問題はないと認められますので、①のパターンの学生には、話し合いを通じて出席しなかった理由の問題を解決するなど、動機付けにより対処できると考えています。②のパターンについては、クラスアドバイザーを中心に話し合いを重ねた結果ですので、いたしかたありません。③のパターンの学生が多いと思われませんが、①となるのを待つしかないのかなと思います。しかし、これまで②を選択する学生が多かったように思います。

#### 4. 体育実技と退学者

どの大学においても退学者を減らす取り組み（授業改善や学生生活・学習面・就職支援等）が、いろいろなされていると思います。

学生支援を考える上で、在学生の要望にできうる限り応えるのはもちろんですが、退学者の側からも大学

の在り方を考える必要があるかと思えます。そこで、体育実技と退学者の関係を本学の退学者の推移からみてみますと、22年度入学生からは、16名の退学者ができました（退学率13.7%）。そのうちほとんどは、②のパターンに該当する学生です。また、同学年で体育実技の単位は取得しているものの四年生への進級が不可能と確定している学生が6名います。このうち3名は、③から①のパターンに変容し、5年間で卒業するよう授業を受けるようになりました。そして2名が③のパターンで残りの1名は、学生相談室、保健室の話によりますと「鬱」ということでした。この学生を3Sさんとしておきます。

23年度入学生については、10名の退学者と病死のため除籍の学生が1名います（退学率10.5%）。退学者のうち8名は、入学後ほとんど大学に来ていない学生です。体育実技単位取得者で、退学していった学生は2名でした。1名が経済的、1名は進路変更が退学理由でした。また、2名ともに1年間で上限に近い（1セメスターで24単位が上限）取得単位数でした。

24年度は、まだ半年しか経っていませんので退学者はなく、身体的な病気で体育実技履修を先に延ばした学生が、1名います。ちなみに、体育実技が選択科目であった21年度入学生、現四年生の退学者は19名（退学率、16.3%）で、また20年度入学生（今年3月卒業生）は、25名で退学率18.8%でした。

#### 5. おわりに

本学においては、体育実技必修化後、退学率が減少傾向にあります。

必修化されてまだ2年半しか経っていませんので軽々にいえませんが、今後データを積み重ねてみると、もしかしたら大学体育が退学率減少に影響を及ぼす可能性があるかもしれません。そして、授業研究やFD研修を進めていく中で、学生の学士力向上に大学体育は、力を発揮していくとともに、上記のような視点も成果として評価されてもいいのではないのでしょうか。

退学理由として最も多いのは、取得単位不足がその原因となっています。なんとかこのような学生に大学へ目が向くよう大学体育が力になれませんか。

最後に必修後で体育実技単位未取得学生、3Y・3S・2A～2Eさんの今後を注視していきたいと思っています。それは、このような学生が退学予備軍と思えるからです。

## 崇城大学における体育実技授業が必修となった経緯と現状

崇城大学 総合教育  
健康・スポーツ一同

### 1. 本学の体育実技が必修となった経緯

1991年に大学審議会の答申により大学設置基準の改革が行われ、本学においても従来必修授業となっていた体育実技（生涯スポーツ実習）が選択授業へと変更された。以来、本学保健体育スタッフが相互の情報交換を行いながら授業を運営していた。

2010年に、本学における総合教育（一般教養）の授業の見直しと改革を行うプロジェクトの実施計画（EIプロジェクト）がなされた。大学全体の方向性としては、キャリア教育を重視し学生個々の人間性を高めようとするものであった。

そこで、我々健康・スポーツのスタッフ一同は、体育実技がまさに大学の方向性に合致した教科であり、必修へと再変革させる絶好の機会になると捉えた。スタッフの統一見解の元、本学の方向性に則した授業変革のアピールを行い、本学のプロジェクトの一環として体育実技の必修化が本学内で認められた。

また、必修を契機に「生涯スポーツ実習」という授業の名称を、社会人としての素養を身につける意識付けをより高めさせる意味で「生涯スポーツ教育」へと刷新した。

### 2. 必修への改革上の運営方針

体育実技を必修とする上でのコンセプトを下記の要領とし、保健体育スタッフ間の統一見解を図った。

従 来 ⇒ スタッフが個別に担当種目別に教材研究を行っての授業運営

必修後 ⇒ 年間計画に基づいた統一プログラムでの授業運営

### 3. シラバスに掲げた到達目標及び授業終了後に目指すべき人物像

#### 《到達目標》

- (1) 体力・健康の維持・向上
- (2) チームワークの重要性の理解とリーダーシップや協調性の習得
- (3) 礼儀・作法の習得
- (4) コミュニケーション能力の向上

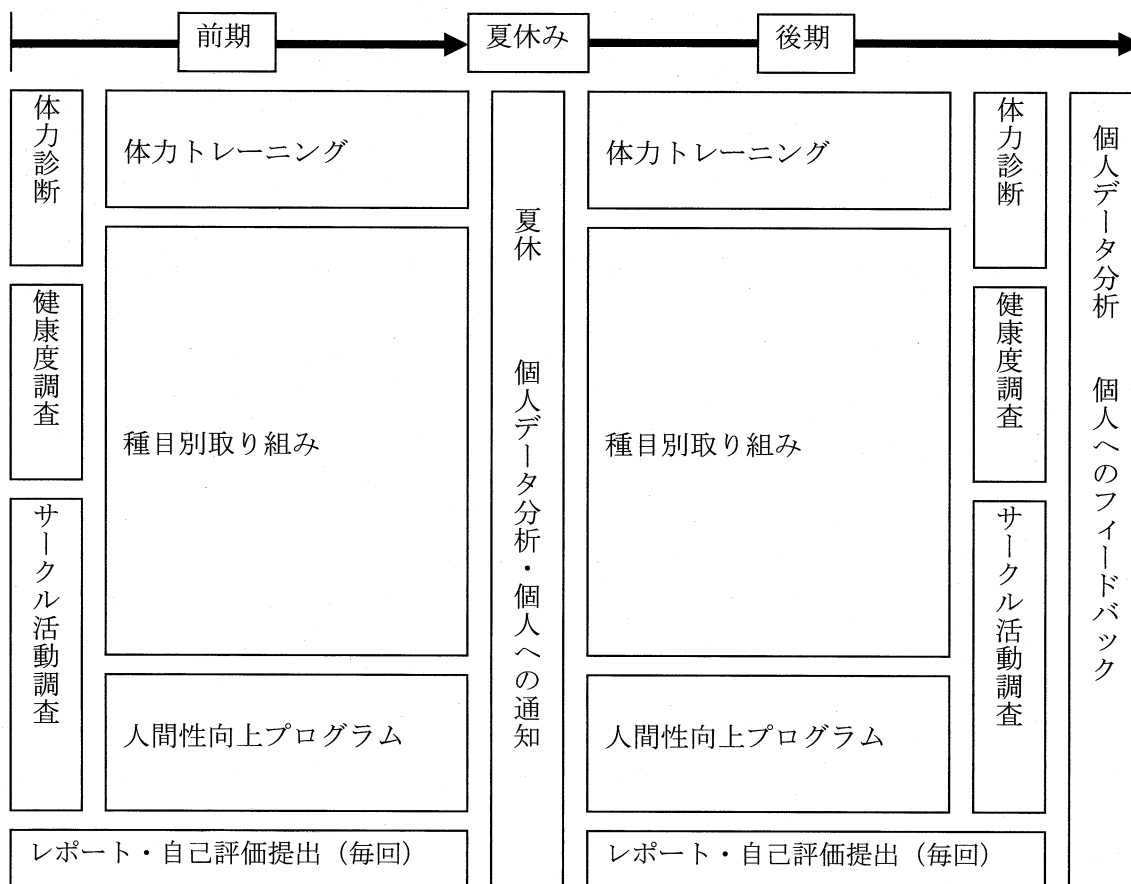
#### 《授業終了時の成長した目指すべき人物像》

- (1) 礼儀正しく周囲への感謝の気持ちを忘れず素直さや謙虚さがある人材
- (2) 将来の希望と自己への自信に溢れている人材
- (3) 人間性が高く周囲から好感がもたれる人材

### 4. 必修後に取り入れた統一プログラムでの授業内容

- (1) 体力向上のトレーニング（前後期1時限）
- (2) 体力診断テスト（前後期1時限）  
⇒ オリジナルの集計用紙による調査及び集計結果の個人フィードバック
- (3) 生活習慣アンケート調査（前後期1時限）  
⇒ オリジナルの集計用紙による調査及び集計結果の個人フィードバック
- (4) 人間性向上プログラムの実施  
⇒ 毎時限にオリジナルの関連資料を作成配布
- (5) レポート提出  
⇒ 毎時限にオリジナルの個人レポート用紙に反省・感想を記入させ提出

## 5. 2011年度 前期・後期の授業計画



## 6. 必修授業後の学生の主な反応 (アンケート調査結果による)

### 【主な感想】

- A: 「生涯スポーツ教育の授業を受け、今後の生活面の参考になった」
- A: 「人間性の向上につながる話など興味深く刺激になった」
- A: 「スポーツを楽しむだけでなく将来に役立つ授業だったと思った」
- A: 「みんなの意見をまとめるのがとても勉強になった」
- A: 「授業を受けて自分自身の人間性が高まったような気がした」
- A: 「お互いの意見を出し合う機会がありよかったと思う」
- A: 「就職活動にとっても役立つ授業内容だと思った」
- A: 「教養が身についたと思う」
- A: 「自分自身を見直すいい機会だった」
- A: 「礼儀作法を考える良い機会だった」
- A: 「挨拶の大切さをあらためて実感した」
- A: 「自己アピールの重要性を学ぶことができた」

A: 「授業がとても充実していた」

A: 「コミュニケーション能力がついた」

### 【少数意見】

- A: 「授業の焦点がよくわからないときがある」
- A: 「体育の授業で人間性向上のプリントを配ってま  
でやる必要はないと思った」
- A: 「積極的な参加ができなかった」
- A: 「もっとスポーツの時間を増やして欲しかった」
- A: 「方法を改めたほうがよい」
- A: 「時間ぎりぎりまで食い込み着替えや移動時間が  
足りなかったような気がする」

## 7. 必修に伴い新たに取り入れた授業内容の反省 (新たに取り入れた授業内容)

- ① 体力向上トレーニングの統一実施
- ② 生活習慣・健康度調査の実施,
- ③ 体力及び筋力診断テストの一斉実施,
- ④ 「人間性向上プログラム」の実施,
- ⑤ 毎回のレポート提出の5点であった。

### 〈項目別の反省〉

①の統一実施においては授業のスタートとして学生に授業の心構えや授業内容への理解を深める良い機会となった。

②の調査においては学生の現状が把握でき今後の課題も見えてきた。診断結果では、要注意の学生がどの学科もほぼ半数を数える結果となっており、むしろ後期に増加してしまった学科も見られた。この現状は、フィードバックにおいて学生個々に自覚を持つよう指導を行ったが授業の中で訴えていかなければならない今後の課題である。

③の体力・筋力の診断テストにおいては、自分自身の体力・筋力を把握して受験において少々落ちているであろうこれらの能力の回復に自覚を持たせる啓発の狙いがあった。反応も予想通りで本年度も是非実施したい。

④の「人間性向上プログラム」においては、従来はスポーツ種目を学習する中で考えさせていたが、具体的なテーマを設定して深く考えさせる狙いであった。実施についてのアンケート調査で判明したように約70%の学生が本プログラムの意味を理解して積極的に取り組んでいた。しかしながら、「もっとスポーツ種目を学習する時間を確保してほしい」との要望が出た

のも事実である。本年度は、プログラムの実施方法や身体活動と連動させる具体的な他の方法も考慮してみたい。

⑤の統一したレポート用紙の提出により、学生のタイムリーな反応が反映され、スタッフ間の学生指導に関する一体感も生まれて、チュートリアルな指導体制も整ってきたように思われる。

## 8. 総括

必修後の中核は、スタッフ相互の連携を強めた授業への取り組みであった。教科会議を頻繁に行い統一したプログラムを実施し、相互の情報を交換し合いながら学生の指導に対峙することができたと考える。やはり、統一したプログラムを実施することでより充実した授業を展開することができたと思われる。

本年度は、必修授業への変革2年目として、「スポーツを通しての人間教育」という本来の体育実技の目的を踏まえて、昨年度取り組んだ授業の刷新を継続して実施したいと考える。

学生の意見を反映させながら、スタッフ一同結束して1年間の「生涯スポーツ教育」の授業展開の充実を図っていきたい。